



## 小児の腸内細菌と栄養、プロバイオティクス効果

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 日本DOHaD研究会 公開日: 2019-01-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 東海林, 宏道, 山城, 雄一郎 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10271/00003454">http://hdl.handle.net/10271/00003454</a>

シンポジウム 1-2

小児の腸内細菌と栄養、プロバイオティクス効果  
Gut microbiota, nutrition and probiotics in children

東海林 宏道、山城 雄一郎

順天堂大学小児科、順天堂大学大学院プロバイオティクス研究講座

Hiromichi Shoji, Yuichiro Yamashiro

Department of Pediatrics, Juntendo University Faculty of Medicine

Probiotics Research Laboratory, Juntendo University Graduate School of Medicine

近年、developmental origins of health and disease (DOHaD) の発現に影響する重要な因子として腸内細菌の役割が明らかになってきた。妊婦の腸内細菌は児の腸に移行するため、妊婦の栄養状態と腸内細菌の多様性は児の腸内細菌確立に大きな影響を及ぼす。健康な母乳栄養児では生後 3 か月までに *Bifidobacterium* 優位の腸内細菌叢を形成するが、腸内細菌構成は分娩様式、栄養方法、抗菌薬の使用などにより大きく影響を受ける。特に帝王切開分娩は、母体産道から *Lactobacillus* や *Bifidobacterium* を獲得する機会を逸し、我々の研究では *Clostridium perfringens* が幼児期まで定着する要因となる。生後早期の菌構成異常 (dysbiosis) は将来の肥満、2 型糖尿病、免疫・アレルギー疾患の発症リスクを伴う。NICU での管理を必要とする早産児では、帝王切開分娩が多く、母乳による経腸栄養の確立が遅れ、抗菌薬使用頻度も高いことから dysbiosis となるリスクがさらに高い。これら dysbiosis を改善させるための対策としてプロバイオティクスの投与が挙げられる。我々はこれまでプロバイオティクス投与のパイロットスタディーを行い、早産児 (*Bifidobacterium breve* 投与) や肥満小児 (*Lactobacillus casei* 投与) において良好な成績を得ている。今後は、個々の妊婦、新生児、小児の腸内細菌を解析し、必要なプロバイオティクスを投与するといったオーダーメイド医療の実現が期待される。

【略歴】

学歴・職歴：

- 1997 年 順天堂大学医学部卒業
- 2003 年 順天堂大学大学院医学研究科内科系小児科学課程修了
- 2003 年 順天堂大学医学部小児科思春期科助手
- 2005 年 ドイツ・ミュンヘン大学 Dr. von Hauner 小児病院留学
- 2006 年 順天堂大学医学部小児科思春期科助手
- 2008 年 順天堂大学大学院医学研究科小児思春期発達・病態学准教授

専門領域：新生児学、小児栄養学

所属学会：

日本小児科学会、日本周産期新生児学会、日本新生児成育医学会、  
日本小児栄養消化器肝臓学会、日本 DOHaD 学会、日本母乳哺育学会